石仏あれこれ

シリーズB 石仏を考える

B3 アショカ王(仏教の展開)

森隆一

アショーカ王の柱（Wikipedia 「アショーカ王」より）

B3. アショカ王(仏教の展開)

3.1. 仏典結集

釈迦以後の仏教を考えるのに欠かすことのできない仏典結集について調べてみた。

Wikipedia「結集」では、次のように書かれていた。

仏教の経・論・律(三蔵)をまとめた編集会議のことである。サンスクリット語の本来の意味は「ともに歌うこと」であった。比丘たちが集まって釈迦の教えを誦出し、互いの記憶を確認しながら、合議のうえで仏典を編集した事業を結集と呼んでいる。

釈迦の死後、その教えはもっぱら記憶や暗唱を頼りとして受け継がれたため、その散逸を防ぎ、異説の生じることを防いで教団の統一をはかる目的で、弟子たちが各自の伝聞にもとづく資料をもちよって聖典の編纂がなされた。

第１回：伝承によると、釈迦入滅後、王舎城郊外に 500 人の比丘(阿羅漢)達五百羅漢が集まり、最初の結集が開かれたという(五百結集または王舎城結集)。このときは、摩訶迦葉が座長となり、阿難と優波離が、それぞれ、法（Dharma）と律(Vinaya)の編集責任者となった。マガダ国の阿闍世王が大檀越としてこれを外護したといわれる。また、文殊菩薩は十大弟子とも親しく、この結集に参加したとの伝

承がある。

第 2 回： その後のインドにおける結集には、仏滅後 100 年頃、戒律上の異議が生じたことを契機に、毘舎離で 700 人の比丘を集めて開かれたとされる第 2 回結集(七百結集)がある。婆沙論によれば、アショーカ王の時代に根本分裂が起きた事になっている。南伝のマハーワンサによればシシュナーガ朝のカーラーショーカ王の治世においてであるとしている。

第 3 回： 南伝によれば、ブッダ入滅後 200 年にあたるマウリヤ朝第 3 代アショーカ王の治下、華氏城で 1000 人の比丘を集めて行われた。紀元前 3 世紀半ばとされる。

北伝の説一切有部の伝承では、紀元後 2 世紀頃クシャーナ朝のカニシカ王のもとで、カシミールの比丘 500 人を集めて開かれた結集があったとされる。他の部派の記録には 3 回以降が行われた記録は見当たらない。

第 4 回： 南伝では、紀元前 1 世紀、ヴァッタガーマニ・アバヤ王の治世に、スリランカのアルヴィハーラ石窟寺院にて、500 人の比丘を集めて第 4 結集が行われたとされる。

第 5 回： 1871 年、ビルマコンバウン朝のミンドン王治世、新首都マンダレーにて、第 5 結集が行われた。

第 6 回： 1954 年、ビルマのヤンゴンにて、第 6 結集が行われた。現在、大蔵出版から刊行されている片山一良訳「パーリ仏典」シリーズは、この第 6 結集本を底本

としている。

上記記事から、大筋を検討する。

第 1 回は、釈迦入滅(直)後に、王舎城郊外で、釈迦の教えを誦出し、互いの記憶を確認しながら、合議のうえで仏典を編集した。王舎城はマガダ国の都と思われる。近くに竹林精舎がある。

第 2 回の開催地毘舎離は、古代インドの十六大国の 1 つヴァッジ国内にあった商業都市で、リッチャヴィ族(離車族)の住んでいた地域で、自治制・共和制がしかれ、通商貿易が盛んで、自由を尊ぶ精神的雰囲気があったと言われている、ということである。

根本分裂が起きた事を契機に開かれたということである。

第 3 回は、南伝によれば、ブッダ入滅後 200 年にあたるマウリヤ朝第 3 代アショーカ王の治下、華氏城で行われた。華氏城(現パトナ)は王舎城に替わり造られた都である。

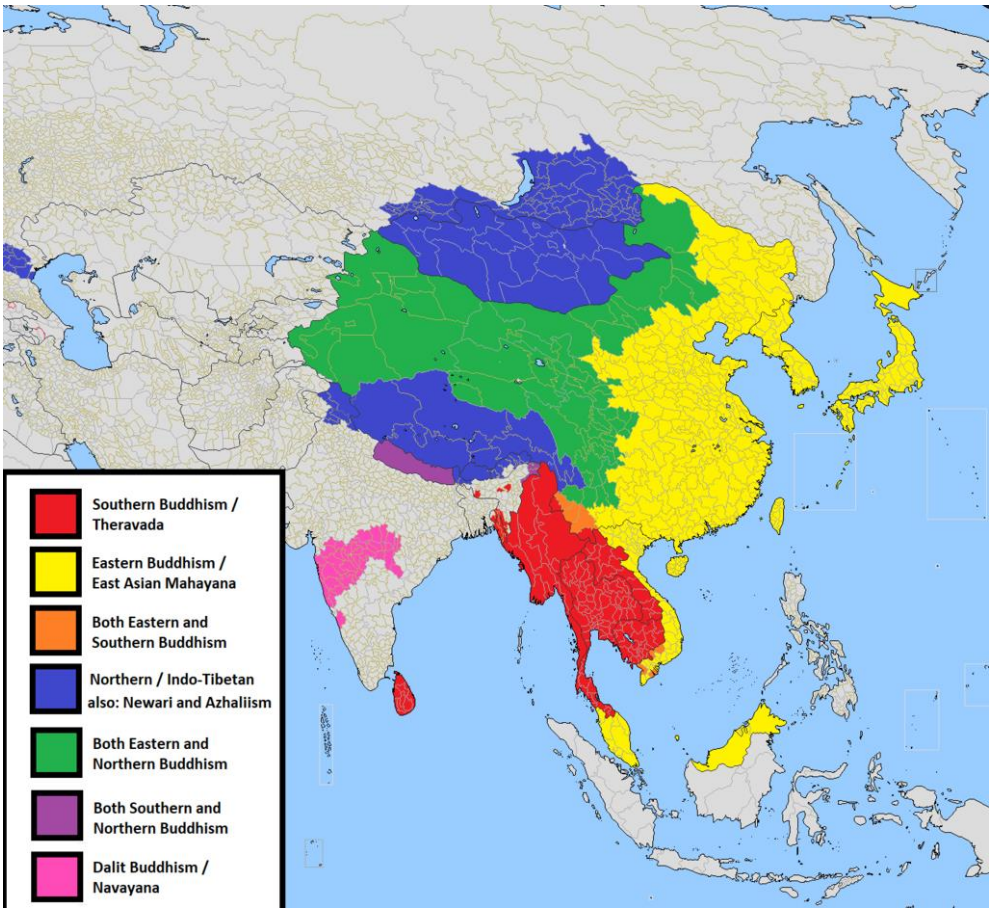
北伝の説一切有部の伝承では、紀元後 2 世紀頃クシャーナ朝のカニシカ王のもとで行われた。

結集が行われたということは、行う必要があったということともいえ

る。釈迦の教えを誦出し、互いの記憶を確認しながら、合議のうえで仏典を編集するならば、1回だけで十分と思われる。

第 2 回の契機となった根本分裂とはなんであろうか。上から、分裂は第 3 回の解説に現れる南伝派と北伝派に分かれることであろう。これが根本的であることはわかっていないし、仏教の教義に関わることであり、今後もおそらく、わからないと思われる。

Wikipedia「大乗仏教」で次の図を見つけた。



B3.1 仏教の部派の分布

Wikipedia の解説文：**大乗仏教の内、後期密教を含まないもの(黄)含むもの(橙)、上座部仏教(赤)の分布図。経典言語の違いに着目した場合は、赤:パーリ語、黄:漢訳、橙:チベット語にほぼ対応する。この地図には図示されていないが、インド仏教とネパールのネワール仏教ではサンスクリット語の仏典が用いられている。**

小乗仏教と大乗仏教に関しては、漠然とした知識しかない。考えてみれば、日本以外の仏教についても殆どわかっていない状況である。

小乗仏教については、スリランカと東南アジア、(セイロン・ビルマと交趾支那)で信仰されている。ニュースや写真からは、釈迦の涅槃像を祭っているところが多く見られる。南伝初期は、釈迦の時代に近い状態であったと思われる。後年、タイに見られるような大寺院が造られるが、これは寄進者の財力が増えただけといえるかどうか。

Wikipedia「アンコール・ワット」

アンコール・ワットは、カンボジア北西部に位置するユネスコの世界遺産(文化遺産)であるアンコール遺跡の一つであり、その遺跡群を代表する巨大な寺院である。建設時はヒンドゥー教寺院として作られたが 16 世紀後半に仏教寺院に改修され、現在も上座部仏教寺院となっている。

クメール語でアンコールは王都、ワットは寺院を意味するため、アンコール・ワットは「国都寺院」という意味となる。大伽藍と美しい彫刻を特徴としクメール建

築の傑作とされ、カンボジア国旗の中央にも同国の象徴として描かれている。

大乗仏教は、釈迦の時代の仏教徒はかなり変質したものになっている。北伝先は、ガンジス川の上流地域で、パンジャーブ地方である。変質の内容を説明できる知識はないし、今後も持てるとは思えない。

宗教が広まる時、その地の風習を何らかの形で取り込んでいる。取り込むのは、主要な産業の重要な行事になると考えられる。例として、キリスト教における復活祭が挙げられだろうか。

Wikipedia「復活祭」では、

基本的に‘春分の日の後の最初の満月の次の日曜日’に祝われるため、年によって日付が変わる移動祝日である。日付は変わるものの、必ず日曜日に祝われる。キリスト教が優勢な国においてはその翌日の月曜日も休日にされていることがある。欧州における主要株式・債券市場は、復活祭の前の聖金曜日、復活祭後の月曜日に休場する。東方教会と西方教会とでは日付の算定方法が異なるため、日付が異なる年の方が多い。

復活祭を表す英語(イースター Easter)およびドイツ語(オースタン Ostern)はゲルマン神話の春の女神(エオストレ(Eostre)」の名前、あるいはゲルマン人の用いた春の月名(エオストレモナト Eostremonat)に由来しているともいわれる。8 世紀の教会史家ベーダ・ヴェネラビリスがこれに言及し、ゲルマン人がエオストレモナトに春の到来を祝う祭りをおこなっていたことを記録している。

と書かれている。

春分の日に近い日に設定され、秋に収穫する穀物の栽培の準備を行う農耕儀礼が基になっていると考えられる。

Wikipedia「パンジャーブ」

パンジャーブは、インド北西部からパキスタン北東部にまたがる地域。インド・パキスタンの分割の際に、インド側とパキスタン側に分割されている。語源は、ペルシア語‘5 つの水’を意味するパンジュ・アーブで、この地を潤す 5 つの河川、北から順にインダス川とその 4 つの大きな支流、ジェルム川、シェナブ川、ラーヴィー川、サトレジ川に由来する。パンジャブはこれらの大河に囲まれた地域で、灌漑によって小麦・米の生産力に優れた豊かな農地となっており、インド・パキスタン両国にとっては重要な穀倉地帯である。

古代にはガンダーラ(紀元前 6 世紀-11 世紀)が栄え、中心都市はペシャーワル、チャールサダ、タクシラ、フントなどに移り変わった。また、紀元前 6 世紀以来、ペルシャ帝国(アケメネス朝)の版図はインダス川流域付近まで及んでいたが、紀元前 4 世紀にアレクサンドロス 3 世(大王)率いるマケドニア王国(アルゲアス朝)軍はペルシャ王ダレイオス 3 世を破った後インドに侵入し、紀元前 326 年のヒュダスペス河畔の戦いが行われた。当時、東部パンジャーブのジェルム川からシェナブ川に至る地域はパウラヴァ族の王であったポロスの領土となっていた。

紀元前 4 世紀末頃から、インダス流域を含む北西インド地方は、マウリヤ朝(マ

ガダ国)のチャンドラグプタの版図に含まれた。紀元前 2 世紀頃から西暦後 1 世紀頃まで、インド・グリーク朝の治世となっていた。

3.2. 仏典５つ

図 B2.3 の後の考察で、

リサーチ・ナビ＞主題から調べる＞哲学・宗教＞アジア発祥の宗教の聖典・教典・経典＞仏教＞「大蔵経（一切経）を調べる」

という国立国会図書館のサイトを見つけた。今回は大蔵経に

漢訳大蔵経

南伝大蔵経（パーリ三蔵）

西蔵大蔵経（チベット大蔵経）

の 3 系統があるという他でも得られるデータのみを引用したが、サイトの今後の充実と使用法の簡易化が期待される。

ここで、阿含経・般若経・浄土教・華厳経・法華経を Wikipedia で調べた。般若経を除き、教を宗で置き換えれば、阿含宗・浄土宗・華厳宗・法華宗となる。これに、中国起源かもしれない、天台宗と禅宗を加えれば、老舗の宗派が揃うことになる。

Wikipedia「阿含経」

阿含経は、最も古い仏教経典集であり、釈迦の言葉を色濃く反映した真正な仏教の経典ものとされる。阿含とは、サンスクリット・パーリ語のアーガマの音写で、

「伝承された教説、その集成」という意味である。阿含の類義語には部（Nikāya）があり、パーリ仏典ではそれが用いられている。

釈迦の死後、その教説は迦葉や阿難を始めとする弟子たちを中心として何回かの結集を経てまとめられ、経蔵(sutta-piṭaka)を形成した。他方、守るべき規則は律蔵(vinaya-piṭaka)としてまとめられたが、一般に紀元前4世紀から紀元前1世紀にかけて徐々に作成されたものであると言われている。その経蔵はそれぞれ阿含（āgama）または部（nikāya）の名で呼ばれた。

これらの現存するものは、パーリ語仏典と、それに相応する漢訳経典などである。漢訳では長・中・雑・増一の四阿含があり、大正蔵では冒頭の阿含部に収録されている。パーリ語訳では五部が伝えられている。両者は共に同一の原典から訳されたもので一定の対応関係がある。

Wikipedia「般若経」

般若経は、般若波羅蜜(般若波羅蜜多)を説く大乗仏教仏典群の総称。最も早く成立した最初の大乗仏教経典群とされる。紀元前後ころから1世紀の半ばころまでに成立したと考えられている八千頌般若経が最も古く基本的なものとされるが、その後数百年に渡って様々な般若経が編纂され、また増広が繰り返された。

中国では下記するように各時代ごとに経典が持ち込まれ翻訳がなされてきたが、唐の玄奘が西域から関連経典群を持ち帰って漢訳し、集大成したとされるのが大般若波羅蜜多経 600 余巻(660-663 年)であり、これはあらゆる経典中最大のものであ

る。

一般に空を説く経典とされているが、同時に呪術的な面も色濃く持っており、密教経典群への橋渡しとしての役割を無視することはできない。

Wikipedia「浄土教」

浄土教とは、阿弥陀仏の極楽浄土に往生し成仏することを説く教え。浄土門、浄土思想ともいう。阿弥陀仏の本願に基づいて、観仏や念仏によってその浄土に往生しようと願う教え。浄土教の成立時期は、インドにおいて大乗仏教が興起した時代である。紀元 100 年頃に無量寿経と阿弥陀経が編纂されたのを契機とし、時代の経過とともにインドで広く展開していく。しかし、インドでは宗派としての浄土教が成立されたわけではない。

浄土往生の思想を強調した論書として、龍樹(150 年 - 250 年頃)の十住毘婆沙論易行品、天親(4-5 世紀)の無量寿経優婆提舎願生偈(浄土論・往生論) がある。天親の浄土論は、曇鸞の註釈を通じて後世に大きな影響を与えた。

なお観無量寿経は、サンスクリット語の原典が発見されておらず、おそらく 4-5 世紀頃に中央アジアで大綱が成立し、伝訳に際して中国的要素が加味されたと推定される。しかし中国・日本の浄土教には大きな影響を与える。

Wikipedia「華厳経」

華厳経は、インドで伝えられてきた様々な仏典が、4 世紀頃に中央アジアでまと

められたものであると推定されている。 華厳経全体のサンスクリット語原典は未発見であるが、十地品・入法界品などは独立したサンスクリット仏典があり現代語訳されている。

智顗の見解では、この経典は釈迦の悟りの内容を示しているといい、ヴァイローチャナ・ブッダという仏が本尊として示されている。ヴァイローチャナ・ブッダを、太陽の輝きの仏と訳し、毘盧舎那仏と音写される。毘盧舎那仏は、真言宗の本尊たる大日如来と同一の仏である。華厳経にも、如来蔵思想につながる発想が展開されている。陽光である毘盧舎那仏の智彗の光は、すべての衆生を照らして衆生は光に満ち、同時に毘盧舎那仏の宇宙は衆生で満たされている。これを一即一切・一切即一とあらわし、あらゆるものは無縁の関係性(縁)）によって成り立っていることで、これを法界縁起と呼ぶ。

Wikipedia「法華経」

法華経は、大乗仏教の代表的な経典。大乗仏教の初期に成立した経典であり、誰もが平等に成仏できるという仏教思想が説かれている。聖徳太子の時代に仏教とともに日本に伝来した。複数ある漢訳の中では鳩摩羅什によるものが特に普及しており、その訳名は妙法蓮華経である。

法華経の原本は紀元１世紀以降にインドで編纂されたという説が有力である。当時は、特別な修行を経た出家者のみが救済されるという考えが部派仏教の主流を成していた。これに対し、法華経は、小乗・大乗の対立を乗り越えつつ、全ての人間

が一乗（菩薩乗）を通じて平等に救済されるという仏教思想を強調した内容と理解される。初期仏教経典（阿含経）記載の仏陀の教えやエピソードとの差異については、聞き手のレベルにあわせた方便であったとした上で、より本質的なレベルでは、法華経の内容こそが、本来の仏陀の教えに立ち返るものであると説くとともに、地涌の菩薩たる仏教信者にとって弘通（布教）を重要な役割と位置づけ、直面するであろう法難への心構えも説くなど、一切の衆生を救うために法華経の教えを広めていく観点を重視している点にも特色がある。維摩経と配役が被っているところがあり、維摩経への批判という面があったとの指摘もある。

Text としては

維基文庫＞経書＞「佛教典籍」、「大正新脩大藏經」

で見ることが出来る。

この他に、神道教に「大祓詞」「禊祓詞」「祓詞」もある。

また、「SAT 大正新脩大藏經テキストデータベース」もあるが、使用法がわからない。

現代語訳やこれらの朗読のサイトもある。

「般若心経 現代語訳」（朗読）

「寂静山禅定院：梅尾泰巌」　通読

仏陀の真理の言葉　第１章～第 26 章

尼僧の告白　テーリーガーター

佛弟子の告白　テーラガーター

ブッダ最後の旅　マハー・パリニッバーナ・スッタンタ＝大般涅槃経

ブッダの言葉　スッタニパータ

ブッダの感興の言葉　ウダーナヴァルガ　法句経

ブッダの真理の言葉　ダンマパダ　法句経

寂静禅経

他のサイトを上げる。

「中村元」＜Kaoru GreenEmerald

「eijun handa」　読経(音声)

「心響會愛媛真言宗豊山派太鼓」

「altermagazine」荒木重雄の講演集が主体

日本仏教の展開・仏教に親しむシリーズ・仏教講座

「観世音菩薩」現代語訳朗読　　法華経が主

妙法蓮華経・阿弥陀経・地蔵菩薩本願功徳経・薬師本願功徳経・

本生譚(ジャータカ)兎の話

3.3. アショカ王

Wikipedia「マウリヤ朝」

紀元前 322 年頃から紀元前 185 年頃に、古代インドで栄えたマガダ国に興った王朝である。紀元前 317 年頃、チャンドラグプタによって建国された。アショーカ王の時に全盛期を迎え、南端部分を除くインド亜大陸全域を統一した。しかしアショーカ王の死後国家は分裂し、紀元前 2 世紀初頭、シュンガ朝の勃興により滅亡した。

彼の勅令に当時主要な宗教集団として仏教・バラモン教・アージーヴィカ教・ジャイナ教が上げられている。主にパータリプトラに宮殿を構えた。

Wikipedia「アショーカ王」

アショーカ王(阿育王、マウリヤ朝、BC268-BC232)の時に全盛期を迎え、南端部分を除くインド亜大陸全域を統一した。しかしアショーカ王の死後国家は分裂し、紀元前 2 世紀初頭、シュンガ朝の勃興により滅亡した。

アショーカ王は特に仏教を保護した。

アショーカ王の柱、アショーカ・ピラー、アショーカ塔、阿育王塔はアショーカ王が建立したとされる柱あるいは塔。表面に東部プラークリットで碑文が刻まれており、仏教の歴史の解明にかかせない貴重な資料である。柱のほかに岩に刻まれた碑文もあり、こちらは東部プラークリ

ットのほかに西部プラークリット、ガンダーラ語、およびギリシア語とアラム語の
二言語で記されたものがある。

釈迦の生誕の地ルンビニの石柱

デリーの鉄柱とはインドのデリー郊外にある錆びない鉄柱。紀元 415 年に建造されたものであるため、当然アショーカ王が建造したものでは無いが、一般にアショーカ・ピラーと呼ばれている。

アショーカ王の時代は仏教の歴史でいう根本分裂の時代に相当し、石柱にも分裂を諌めるアショーカ王の文章が掲載されている。内容からみてアショーカ王は上座部を支持していたようである。

インダス川流域への浸出と分裂の関係。

Wikipedia「サーンチー」より

紀元前 3 世紀にアショーカ王は 8 万 4 千もの釈迦の遺骨(仏舎利)を安置する卒塔婆(ストゥーパ)を建立した。そのうちの 8 つがサーンチーに建てられた。現在、3 つが残っている。

第一塔は紀元前 3 世紀頃の仏塔を紀元前後に増拡したもので、もっとも完全な形を保っている。第一塔がサーンチーの塔である。

Wikipedia「サ-ンチ-の仏教遺跡」

仏像は当然無いと思われる。しかし、レリーフは刻まれている。釈迦の説法図など、釈迦は菩提樹等で表現されているが、他の人物像では、儀軌 にある仏が描かれている可能性は高い。

Wikipedia「インドの仏教」では、**仏教が急激に広まるのは、マウリヤ朝第3代アショーカ王の時代である。彼は、仏教以外の宗教も奨励したが、何より仏教を広めるのに尽力をした。この頃、戒律の解釈問題で教団内に対立が起こり、分裂しそうになった。アショーカ王の仲裁もあったが、上座の長老たちが新しい見解を否定して、ついに上座部と大衆部に根本分裂した。仏滅後約100年のことで、この戒律の異議のため、毘舎離で七百人の比丘を集めて第二結集が行われた。さらに仏滅後200年には、アショーカ王の時代に、パータリプトラで1,000人の比丘を集めて、第三結集が行われた** と書かれている。

教団が大きくひろがると対立が起きる。これは、布教の対象により、すなわち、高原の草原地帯と、低地の亜熱帯農業では、協議が微妙に変ったり、その解釋がずれていくことによると考える。

世界史で宗教会議を聞いた記憶がある。Google で検索した。
世界史の窓＞世界史用語解説　授業と学習のヒント＞公会議／宗教会議
公会議とはローマ帝国皇帝または教皇が主催、ローマ＝カトリック教会の教義を決

定する最高会議。古代では皇帝が召集するのが原則で、ニケーア公会議に始まり８回開催された。それ以降はカトリックでは公認されたものが 21 回開催されている。ただし、東方教会やプロテスタントでは古代の８回以外を公会議としては認めていない。なお宗教会議（教会会議）といわれる会議もあるが、正確には区別されるもので参加者、地域が限定された高位聖職者の会議を宗教会議（教会会議）という。教会大分裂（シスマ）となった１５世紀には教皇の権威が低下すると、教皇よりも公会議が上位に立つという公会議至上主義が台頭する。

21 回の開催年のみを転載する。

第１回　325 年　第２回　381 年　第３回　431 年　第４回　451 年　第５回　553 年
第６回　680~681 年　第７回　787 年　第８回　869~870 年
　　これ以降はギリシア正教では認めていない。
第９回　1123 年　第 10 回　1139 年　第 11 回　1179 年　第 12 回　1215 年　第 13 回　1245 年
第 14 回　1274 年　第 15 回　1311～1312 年　第 16 回　1414 年～1418 年　第 17 回　1439～1445 年
第 18 回　1512～1517 年　第 19 回　1545 年～1563 年　第 20 回　1867～1870 年　第 21 回　1962～1965 年

あとがき

本章では、仏典結集と仏典について調べてみた。

調べていくあいだ、何かもやもやした感じが残った。これは、教義の解説の部分が殆ど理解できないことであると思っている。経典を読むことは簡単にできることではなさそうなので、とりあえず、どんな経典があるのかを調べた。

ここまでは仏像出現よりも前の話であるので、この程度に留めておくことにする。